

令和3年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「共同研究班」 研究報告書

令和4年8月31日現在

研究課題名	近現代の中央ユーラシアに関する共同研究		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	宇山 智彦	スラブ・ユーラシア研究センター・教授
	2	長縄 宣博	同上
班員	氏名		所属機関・職
	吉村 貴之		早稲田大学・ 招聘研究員
	専門とする研究分野		
	アルメニア近現代史		
研究テーマ			
1960・70年代の「ナゴルノ・カラバフ問題」			

### 研究成果の概要

今年度この班は、中央ユーラシアの近現代史を参照軸に、ユーラシア大陸（とりわけ旧ソ連と中東）を激震地とする近年の世界秩序の危機を理解することに努めた。その際、ソ連の遺産を重視しながらも、19世紀後半からのロシアの帝国秩序が地域にどのような緊張を蓄積してきたのかを探究した。

班員の吉村は、近年、武力衝突も含む緊張を高めているナゴルノ・カラバフ問題について、ソ連時代の起源を探る研究を行った。コロナ禍で2年続けて現地での文献調査が出来なかったため、今後の研究に向けての論点整理が中心になった。従来の研究では、1970年代のアルメニア人がナゴルノ・カラバフ自治州をソヴィエト・アゼルバイジャンからソヴィエト・アルメニアに移管させるかどうかについてどのように議論し、活動していたかを実証する研究が、1960年代のカラバフをめぐる政治運動や歴史論争に比べて不十分である。特に、同自治州を移管させる請願が単にアルメニア人の知識人サークル内の話に留まったのか、アルメニア共産党内で移管ないし「本国」とナゴルノ・カラバフの関係の見直しが検討されたのかが、まだ明らかにされていない。これは、1988年以降のナゴルノ・カラバフ運動が急速に拡大した背景を知るうえで重要である。またこの問題は、昨今のロシアによるウクライナ侵攻の要因ともなる、1920年代にロシア化が進んでいたウクライナ東部2州で、2014年以降親ロシア派勢力が独立運動を繰り広げる過程と、紛争研究の観点で比較可能な事例となる。

宇山は、ペレストロイカ期の中央アジア諸共和国のエリート層や指導者個人が感じた脅威のあり方が、独立後現在までの各国の政治体制に与えた影響に関する論文を、ロシアの雑誌で発表した。主観的な脅威認識を含む感情が内外政において持つ意味は、ウクライナ侵略戦争にもつながる論点である。また、1919年にカザフのアラシュ・オルダ政府が日本に国際承認を求めた新発見の史料を分析し、危機と変革の時代における民族運動の多面的な戦略を研究した。コロナ禍やアフガニスタン情勢が地域秩序に与える影響や、中央アジア諸国内の政治変動についても多くの論考を発表した。

## 研究成果の概要（続き）

長縄は、1917年のロシア革命の越境的な反響を考察する英語論集を編集する過程で、1870年代からウクライナ戦争までを「長い20世紀」と捉える視座を得た。とりわけ、垂直方向の国家建設（帝国と国民国家）と水平方向の抵抗者のネットワークの弁証法的な関係が旧ロシア帝国の領域と中東で絡まり合いながら表出してきたことに着目した。この見立てを検証すべく、ロシア史研究会大会の共通論題 *Russia and the Middle East* を組織した（吉村が『ロシア史研ニューズレター』124号、8-9頁で参加記を執筆）。史学会公開シンポジウムでは、従来の研究で「穏健」とみなされてきたロシア内地のムスリム地域にも、帝政末期にグローバルなラディカリズムが浸透したことを考える機会を得た。

2022年2月に始まったウクライナ戦争で、比較的平和裏だったソ連解体が後れて暴力的な形で表出し、それと共に冷戦後の国際秩序が終焉したときかんに論じられるようになった。しかしこれはもっと長期的な地殻変動と関係しているのではないか。中央ユーラシアにおけるロシアの帝国秩序の歴史を新たな視座で捉え直すことが今後の大きな課題となる。

## 主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書等）※謝辞の有無について明記願います。

吉村貴之「迫害・戦争と難民」社会経済史学会編『社会経済史事典』丸善出版、2021年、422-423頁。（謝辞無）

吉村貴之「アルメニアの現代政治」（特集「ソ連解体から30年を経た現在」）『ユーラシア研究』64号、2021年、23-25頁。（謝辞無）

吉村貴之「アルメニア共和国」松本弘編『中東・イスラーム諸国 政治変動ハンドブック 2021 (MEIS-NIHU Series No.4)』2022年、283-300頁。（謝辞無）

Томохи́ко Уяма. Влияние перемен периода перестройки на становление политических систем стран Центральной Азии: чувство угрозы и авторитаризм // Международная аналитика. Том 12, № 1. 2021. С. 55-73. （謝辞無）

宇山智彦「中央アジアの新型コロナ問題と国際関係：減速する世界？」川島真、池内恵編『新興国から見るアフターコロナの時代：米中対立の間に広がる世界』東京大学出版会、2021年、157-170頁。（謝辞無）

小野亮介、宇山智彦「カザフ自治政府アラシュ・オルダとシベリア出兵期日本の邂逅と齟齬：マルセコフ要請書と関連史料から見る背景」小野亮介、海野典子編『近代日本と中東・イスラーム圏：ヒト・モノ・情報の交錯から見る』東京外国語大学AA研、2022年、127-199頁。（謝辞無）

Norihiro Naganawa, “‘Bozh’i gosti’ i antiimperializm: Sovetskii khadzh 1920-kh gg.,” in T. V. Kotiukova, ed., *Islam v Rossii i Evrazii (pamiati Dmiriia Iur’evicha Arapova): kollektivnaia monografiia* (St. Petersburg: Aleteia, 2021), pp. 561-582. （謝辞無）

長縄宣博「長い20世紀の終焉とウクライナ戦争」イスラーム信頼学シンポジウム「ウクライナ戦争の背景とその波紋：我々は今どこにいるのか」オンライン（2022年3月25日）（謝辞無）

長縄宣博「静かなラディカリズム：20世紀初頭ロシアのムスリム社会の場合」史学会公開シンポジウム「世界主義の諸様相：コスモポリタニズム・アジア主義・国際主義」オンライン（2021年11月13日）（謝辞無）

長縄宣博 “An Anarchist Turn? A Note for a Transnational History of Revolutionary Russia” ロシア史研究会大会共通論題 *Russia and the Middle East*, オンライン（2021年10月24日）（謝辞無）

## 当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

国立大学の新しい中期計画が始まる令和4年度から5年間、スラブ・ユーラシア研究センターで実施される「領域を超えた地域研究振興のための拠点形成」関連プロジェクト「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」。

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。